

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

— 理想のチームづくり② —

先日、とても嬉しくなることができました。それは4月の北ライオンズ杯でのことです。(先日というにはあまりにも時間が空いてしまいました。No.2の発行が大変遅くなり申し訳ありません。)

それは、あるチームの指導者の試合中の指示が劇的に変化していたことです。そのチームを仮にチームX、指導者をAさんとします。

以前ある公式試合で、チームXの試合をたまたま対戦した時のこと。チームXは一人ひとりのボールを扱う技術が高く、一目でよく練習しているなどわかりました。また、チームとしての動きもよく訓練されていて、中学年でありながら、パスでつなぐ時はつなぐ、ドリブルで抜く時は抜く、またサイドチェンジを試みる等、自分達で考え、選手がよく考えているように見えました。

しかし、残念ながら、Aさんの指示は、選手の考える力を育てるものではありませんでした。特に酷かったのは、選手の判断に対する指示です。周りの大人の目から見ると、明らかに右にサイドチェンジの場面でしたが、その選手は縦にパスを通そうとしてカットされてしまいました。すると「右だろー。」すかさずAさんの声が飛びます。シュートの場面でも、キーパーと1対1になった場面で「打てー。」はずしてしまうと「気持ちが入っていないぞ。」と叱責に近い形になってしまいます。明らかに判断する力=考える力を育てては

いませんでした。
さらに、どうもチームXにはAさんの息子さんがいるようで、一番厳しく指導されているのはどうもその子のようにでした。

「せっかく上手に育てているのに、もったいないな。もっと自信を持たせてあげれば、驚くプレーがいっぱい出てくるのに。このままだと、ベンチを見てプレーする子ばかりになってしまうな・・・。」

デンマークサッカー協会「子どものサッカー10ヵ条」

1. 子どもたちはあなたのモノではない。
2. 子どもたちはサッカーに夢中だ。
3. 子どもたちはあなたとともにサッカー人生を歩んでいる。
4. 子どもたちから求められることはあってもあなたから求めてはいけない。
5. あなたの欲望を、子どもたちを介して満たしてはならない。
6. アドバイスはしてもあなたの考えを押し付けてはいけない。
7. 子どもの体を守ること。しかし子どもたちの魂まで踏み込んではいけない。
8. コーチは子どもの心になること。しかし子どもたちに大人のサッカーをさせてはいけない。
9. コーチが子どもたちのサッカー人生をサポートすることは大切だ。しかし、自分で考えさせることが必要だ。
10. コーチは子どもを教え導くことはできる。しかし、勝つことが大切か否かを決めるのは子どもたち自身だ。

私の尊敬する 池上 正 氏 の著書「サッカーで子どもがみるみる変わる7つの目標」の中に、デンマークサッカー協会の「子どものサッカー10ヵ条」というのが掲載されています。

池上さんには、一昨年度まで、約10年間、四種委員会のサッカー教室(指導者講習会)で、講師として、ご指導いただきましたので、ご存知の方も多いと思います。

池上さんは、その著書の中で、「子どもたちに学ばせよう」という意識を持ちましようと呼び、持論とリンクしているデンマークサッカー協会の「子どものサッカー10カ条」を紹介しています。

著書の中で、池上さんが持論とリンクしているとしているのは、次の3点です。

- 大人の欲望を子どもたちを介して満たしてはならない。
- 大人の考えを押し付けてはならない。
- 自分で考えさせることが大切だ。

指導者Aさんは、指導者講習会にも参加して下さった時があり、その時は、池上さんの考えに深く頷いていたはずなのに……。池上さんの言っていることは「わかる」けれども、「できる」は難しいということか……。

さて、4月の北ライオンズ杯でのこと。チームXが対戦する試合をたまたま観戦することになりました。また、子どもの判断を奪う声が響くのかと半ばあきらめていたところ、Aさんの指示が全く違っているのに気がつきました。明らかに、なるべく指示を少なくしよう。あまり、しゃべらないようにしようとして抑えているのです。しかし、身体を張ったプレーには「ナイスプレー！」カバーリングには「ナイスカバー！」等、褒め、認める声は適宜出ています。極めつけは、シュートを外した子に対してでした。声高らかに「次は入るよ」です。

子どもたちは、のびのび、自分たちなりに判断し、サッカーを楽しんでいました。その日は他の会場へ行かなければならなかったのが残念でした。試合は先制しながら逆転負けしてしまったそうですが、劇的に変化したAさんの、後半の指示を見られなかったのは、本当に残念でした。

後日、あるコーチとの話の中で、チームXのことが話題になり、劇的に変化したAさんへの思いを話しました。するとこんな秘話が返ってきました。

「実は石原さん。Aさんは、Bさんに諭されたんだよ。ある試合のベンチワークがあんまり酷かったんで、それを見ていたBさんに、『そんな指示をしていたら子どもはつぶれるよ。』と言われたらしいよ。」Bさんはあるチームのコーチで指導歴は十数年の方です。その後、AさんはBさんと暫く話し込んでいたそうです。

Aさんの劇的な変化の陰にはこんな秘話がありました。私が嬉しかったことは、Aさんの変化はもちろんですが、Bさんのような方が市川においでになることや、Bさんの話に耳を傾け、取り入れようとするAさんの人間性や両者の人間関係に触れることができたことです。AさんやBさんに止まらず、たぶん、市川市にはこんな素敵な人達がたくさんいるんだと思うとさらに嬉しくなりました。もちろん、池上さんの教えである「子どもを中心に考える」指導が「わかる」から「できる」に、どんどん広がってくれていることも、とても嬉しく思いました。

市川市内の小学校に入学したり、転校したりしてきた子が、サッカーをやりたいと思ったら、身近に、叶えてくれるサッカーチームがある。しかも、そのチームの指導者は、自主性を伸ばしつつ、仲間とともにサッカーを上手にしてくれる。そして人として成長させてくれる。

私の考える市川市内の理想的な状態も決して遠い夢ではないな、と思った次第です。

「委員長通信」へのご意見ご質問は、FAXにて、四種委員会事務所までお願いいたします。 FAX 047-324-3207